

巻頭言 「恵みの場所」

宇野 元

天の高みは人間に輝く 木を包んで花が飾るように
ヘルダリーン「眺望」より

日曜日の午前、芦屋教会の玄関を入ると、外から見た印象とは違った味わいを体験されると思います。晴れの日には、最初に目に映る窓枠や、クローゼットの戸は、実際よりも濃いブラウンに見えます。柔らかい杉の床を踏みしめながら、ロビーを通り、礼拝室へ開いたドアをくぐる。すると、頭上に空間がひろがります。高い天井の頂きが天窓になっていて、そこから自然の光が差しています。室内は明るく、大きなコンサバトリーのなかに身を置いたような爽やかさを感じるでしょう。



パイプオルガンによる前奏がはじまり、司式者が説教壇に立って、聖書の言葉が神の招きの言葉として読まれます。そのとき、お気づきになるでしょうか？ 余分なものがない簡素な空間のなかに、無くてはならない存在として、私たち一人一人が集められています。礼拝式の中ごろから、太陽が真上に来るにしたがって、天窓からの光が、ゆっくりと空間を満たしてゆきます。そのある瞬間、一人一人の肩の上に光が宿ります。

福音書のなかのたいへん印象深いできごとが思い浮かびます。家の屋根に穴をあけてみもとに降ろされた人に、イエス・キリストは、子よ、あなたの罪はゆるされた、と宣言します。するとまわりにいた人々がつぶやきました。アイツは神を冒瀆している、罪のゆるしは天の父だけがなしうることだ。人々は、イエスを横から眺めて、自分たちと変わらぬ一人の人間とみなしていました。あるいは、寒村の大工とっていました。

いっぽう、「子よ」と呼ばれた人は、文字どおり、イエスを見上げます。そのとき、イエスの顔は太陽の光を受けて影になっていたでしょう。その人は、イエスの言葉を、天より自分に贈られた言葉として受けとめます（マルコによる福音書 2:1-12）。彼と同じように神の言葉をききとるよう、私たちはこの場所に招かれています。